วารสารกรุงเทพฯ

クルンテープ

Since 1968　NO. 633 | 2023年 1月－3月

タイ国日本人会
Japanese Association in Thailand

日本人会の建物（1936年撮影）。当時ソーイサップにあった旧テーワウォン外相邸（王室の私有財産）を賃借していた

110th ANNIVERSARY 2023
JAPANESE ASSOCIATION IN THAILAND

特集 2023年卯年

新年のご挨拶

日本国特命全権大使
梨田 和也

タイ国日本人会会長
島田 厚

特集 子どもたちとダンスレッスン！ めざせステージ！

DREAMS for CHILDREN

BALLISTIK BOYZ & PSYCHIC FEVER の
メンバーが語る「僕たちの夢のかなえかた」

特集 国際交流基金 日本語パートナーズ

タイ南部チュンポーン県の日本語パートナーズ島野さん、
教え子の高校生たちと地元のガイドマップを作りました。

vol.23 Phahurat Market

パフラット市場

バンコクの異郷
鮮やかなインド文化に触れる

ラーマ5世の時代以来、100年以上の歴史を持つパフラット地区は繊維商を営むインド系移民が多く、リトル・インディアと呼ばれています。市場の主役は色鮮やかなインド布や裁縫道具。レース、ビーズ、スパンコール、ビジューなど装飾品やインド雑貨が並ぶ通りはスパイスの香りに包まれて、旅行気分を味わえます。

access

MRTサムヨート駅より徒歩約10分

何枚もほしくなるインドコットン

布問屋 MADAN HANDICRAFT

格安のインドコットンはついつい手に取ってしまうかわいらしさ。店のご主人のDalitさんとあれこれ相談しながら買い物が楽しめます。(パフラット市場 376/2-3)

フードコートでチャイを！

インディア・エンポリアム

市場入り口にあるショッピングモール。歩き疲れたらフードコートでチャイやラッシーでひと休み。

たっぷり甘いインドスイーツは色鮮やかで見るだけでも楽しい

さくさくホクホクのサモサとティッキは揚げたてをぜひ。生姜のスパイシーさがたまりません

写真・情報提供／安達麻紀、中村慈恵

2023年 卯 新年のご挨拶

ポストコロナにおける日タイ交流の活性化に向けて

日本国特命全権大使
梨田和也

あけましておめでとうございます。

着任して3年が経ちました。石の上にも三年と言うように、昨年はコロナによる各種規制が撤廃されて、かつての日常が戻ってきたことを実感できました。

昨年10月から、日本とタイの間は、ほぼ自由に行き来できるようになりました。2年以上海外に行けなかった日本の方々が数多く来訪されています。私も多くのお客様とお会いする機会を得ています。岸田総理大臣にも昨年だけで2度ご訪問いただきました。「いつになったら、日本に行けるんだ！」と不満を述べていたタイの人たちも「行ってきたよ」と笑顔で報告してくれます。

不自由な思いはもはや過去のことです。それでも、高い料金を払ってPCR検査を受けたことや、2週間も隔離施設に閉じ込められた辛さは、決して忘れることはできないと思います。入国規制が再び導入されることのないよう、日本大使館としても留意していきたいと思います。

大使館もテレワーク体制は終了し、館員の顔を見ながら仕事をしています。また、タイに来て初めて国内線に乗って地方を訪問しました。チェンマイ、チェンライ、ランパーンといった北部の都市を訪問し、バンコクとは異なる空気を肌で感じることができました。北部の山岳民族や、クロントゥーイ・スラム地域の子どもたちとも貴重な出会いがありました。

昨年、日本とタイは修好135周年を迎えました。両国では、年間を通じて多くの行事が開催され、3年ぶりの復活となったイベントも数多くありました。両国間の活発な交流は、友好関係の増進、経済発展にとって不可欠です。大使館としても、本年は様々な行事を企画・実施していきたいと思います。

在留邦人の皆様が不自由なくタイでお過ごしいただけるように、皆様の声をしっかり受け止めていきます。また、大使館のHPやFB、領事メールに、私自身もツイッターで迅速な情報発信に努めてまいります。

皆さまにとって今年一年が良い年となりますように。

タイ国日本人会は創立１１０周年を迎えます

タイ国日本人会会長
島田　厚

新年あけましておめでとうございます。

２０１９年より続いたコロナ禍も、長いながいトンネルを抜け、久しぶりに晴れやかな気持ちで新年を迎えられているように感じます。

昨年６月末のタイ政府による規制緩和によって、日本人会でも７月より会館利用に関する制限を解除し、少しずつ日常が戻ってまいりました。減少の一途をたどっていた会員数も、徐々にではありますが、回復傾向にございます。同好会や青少年サークルの通常活動のみならず、日本人会ならではのソフトボール大会、盆踊り大会、チャリティーバザーなどの大型イベントも、形式を変えながら、状況に即した新たな形で開催することができております。

特に第49回となるチャリティーバザーは、会場を別館に移し、従来よりも規模を大幅に縮小しての開催とはなりましたが、５００名を超える方にご来場いただき、日本人会のチャリティー活動にご賛同いただくことができました。また、多くの在タイ日系企業様からも商品・現金のご寄付をいただき、タイ社会に少しでも還元したいという在留邦人の厚い思いを繋いでいくことができたと自負しております。改めまして関係企業・団体の皆様にお礼申し上げます。

本年は、タイ国日本人会創立１１０周年という記念の年を迎えます。ここ数年のますますのオンライン化で、私たちを取り巻く生活環境がずいぶん変わったことを実感していますが、その一方で、やはり人と会って時間を共に過ごすことのありがたさも痛感しています。この地で紡いだ１１０年という長い歴史には、オンライン化の波にはさらわれない重みがあることを胸に刻み、タイに暮らす在留邦人の皆様が心身ともに健やかで豊かな生活が送れるような、また、日本人とタイ人の健全な懸け橋となるような活動の場を提供できるよう、これからも邁進してまいります。

最後になりましたが、今年一年が、皆様方と日タイ両国にとりまして幸多き年となることを祈念しつつ、私の新年の挨拶とさせていただきます。

วารสารกรุงเทพฯ
クルンテープ

2023年 1月－3月
NO. 633 ● 目次

P7

P14

表紙：1936年当時の日本人会の建物
場所：ソーイサップ（バンコク）
日本人会の最初の事務所はバーンラック（バーンモー説もある）の日本人倶楽部に置かれ、スリウォン通り、シープラヤーと移転した後、1933年にソーイサップにあった王室の私有財産である旧テーワウォン外相邸を賃借し移転。ここで1945年の敗戦を迎えた。
参照：村嶋英治著『バンコクの日本人』クルンテープ2018年7月号

02 Open to the New Shades
パフラット市場
バンコクの異郷 鮮やかなインド文化に触れる

04 **2023年新年のご挨拶**
ポストコロナにおける日タイ交流の活性化に向けて
日本国特命全権大使　梨田和也
タイ国日本人会は創立110周年を迎えます
タイ国日本人会会長　島田　厚

07 **DREAMS for CHILDREN**
子どもたちとダンスレッスン！ めざせステージ！
BALLISTIK BOYZ & PSYCHIC FEVER from EXILE TRIBE のメンバーが語る「僕たちの夢のかなえかた」

14 タイ南部チュンポーン県の日本語パートナーズ島野さん、教え子の高校生たちと地元のガイドマップを作りました。

20 きっかけはタイ タイから繋がるライフストーリー
エクル直子さん　◆ブラスバンドサークル指導者
サークルは音楽活動を通して生徒が自信をつけ成長する場。

22 俳句と短歌の広場

23 活動報告
【祝】タイ国日本人会は創立110周年記念の年を迎えます

28 すくすく会通信

30 ゴルフ部のお知らせ

30 編集後記

31 タイのお菓子は二度おいしい　ムシカシントーン小河修子
カノム・キーヌゥ
しっとりほろほろ花の香ふわり
上品な味わいの「ネズミの落とし物」

P31

会報誌クルンテープとは

会報誌『クルンテープ』は1968年に発行されて以来、実に50年を超える歴史と伝統と格式ある会報誌です。タイ社会における在タイ邦人の活動の記録誌、よりタイを知っていただく情報誌として魅力ある誌面作りをつづけています。

●ご意見ご感想をお寄せください
「この特集が面白かった！」「タイのこんなことがもっと知りたい！」などなど、クルンテープ読後のご意見・ご感想をお待ちしています。お送りいただいたご意見・ご感想は、内容を確認したうえで日本人会各メディアにてご紹介させていただく場合があります。

●会報誌クルンテープのバックナンバーは日本人会ウェブサイトにてご覧いただけます。
【日本人会ウェブサイト】
https://jat.or.th/jp/bulletin-magazine-krung-thep.php
感想フォーム

DREAMS for CHILDREN

子どもたちとダンスレッスン！ めざせステージ！

昨年８月から半年の予定でタイを活動拠点にしてきたダンス＆ボーカルグループBALLISTIK BOYZとPSYCHIC FEVERが、日本人会会員家庭の40名の小学生たちにダンスレッスン！ めざすは2月に開催される第８回ジャパンエキスポタイランド！ グループメンバーと同じステージでパフォーマンスを披露するために、11月から月に1度のレッスンを重ねてきました。

メンバーが語る「僕たちの夢のかなえかた」

汗と笑顔が光るダンスレッスン風景をお届けするとともに、グローバルな活動を展開するメンバーたちに、これから羽ばたく子どもたちに向けて「僕たちの夢のかなえかた」を語っていただきました。

第８回ジャパンエキスポタイランド
JAPAN EXPO THAILAND 2023
日程：2023年2月3日(金)～5日(日)
会場：centralwOrld, Bangkok
FB: @japanexpothailand

BALLISTIK BOYZ
from EXILE TRIBE

2018年のグループ結成当初から海外でプロモーションツアーを行い、世界を視野に活動してきたダンス＆ボーカルグループ。７人全員が“歌って踊れる”ことを活かしたダイナミックなステージパフォーマンスに定評がある。

アーティストになる夢を描いたのはいつ？　挫折したことは？　夢をかなえるために大切なことは？　そんなお話をメンバーのみなさんに語っていただきました。

あきらめない強い気持ちってすごく大切なのかなと思う。
―日高竜太（ひだか・りゅうた）

僕がアーティストをめざすようになったのは高校１年生の頃です。きっかけはＥＸＩＬＥさんです。将来を真剣に考えたとき、僕もアーティストになりたいと15歳のときに決めました。出身地の宮崎県のＥＸＰ※Ｇでレッスンを受けたいと家族に相談したところ、一番協力してくれたのはおじいちゃんでした。おじいちゃんは昔、歌手として活動していたことがあるんです。15歳で歌やダンスのレッスンをスタートして、BALLISTIK BOYZ（ＢＢＺ）のメンバーになれたのは22歳のとき。その７年の間には壁にぶつかったりオーディションに落ちたり、挫折は何回かあったけれど、夢がブレたことはなかったですね。ＥＸＩＬＥさんじゃなかったら歌手にならなく

RYUTA 日高竜太

RYUSEI 海沼流星

YOSHI 加納嘉将

てもいいと思っていたくらいで、その覚悟で夢に向かって活動していました。それほど強い憧れがEXILEさんでした。

やりたいことがあったら全力でやってみる。もしだめでもきっと自分の財産になる。

加納嘉将（かのう・よしゆき）

自分は仙台出身で、中学生の頃に東日本大震災があり、そのときにEXILEさんが何度も被災地を訪問しているのをテレビで知って、歌で元気を与えていく姿をすごくカッコいいと思っていました。高校生になって被災地から来た子たちに話を聞くと、一生忘れないと話していました。僕はボランティアに参加していて、その活動から復興関係の仕事に就きたいと考え、大学に入学しました。だけど好きな歌を仕事にして、なおかつ人に夢を与えることができたらという思いが強くなり、このままでは中途半端になる気がして大学を辞めたいと両親に言ったんです。「やりたいようにやるといい。一度の人生だし」と言ってくれて、親の懐の深さに今もすごく感謝しています。上京して歌をやろうと思った矢先にEXPGスタジオが仙台にできて、特待生オーディションに受かることができて、それと同時に大きなオーディションもあって、人生のすべてをかける勢いで臨んで、今BBZのメンバーとして活動しています。

自分の気持ちに素直に。それを信じて進んでいけばいい。

海沼流星（かいぬま・りゅうせい）

初めて自分で何かをやりたいと父に言ったのがダンスでした。中学1年のときに地元で始めましたが当時は趣味程度。父親がEXILEさんの大ファンだったこともあって、EXPGのほうが環境もいいしアーティストになれるかもしれない。ダンスを仕事にできるかもしれないと勧められて、高校生になるタイミングでEXPGに入りました。先輩方のバックダンサーをさせていただく中で、自分もアーティストになりたい、こんなふうに応援してもらえる存在になりたいと夢を抱くようになっていきました。中学の頃は日本語が流暢ではないブラジル人の母親の仕事を通訳としてサポートしていたので、将来は通訳になって世界に出たいという気持ちもあり、大学で英語かフランス語を学ぶつもりで受験を視野に勉強したこともあったのですが、最終的にはダンスを選びました。ダンスで海外をめざすアーティストになりたいという夢は今も持ち続けています。

共有すること。仲間ができると周りの人が助けてくれる。

深堀未来（ふかほり・みく）

ダンスは小さい頃からやっていたのですが、10歳のときに初めてEXILEさんのツアーで大きいステージで踊らせていただいて、その景色を見たときに、自分が主役となってまたこういうステージに立ちたいと思ったんです。アーティストになるという夢を持ったのはそれがきっかけでした。その後グローバ

※EXPG STUDIO（イーエックスピージー スタジオ）はダンススクール。
EXILEをマネージするLDHが開業し後に株式会社expgが運営。

ルジャパンチャレンジで、ニューヨークに3年半留学させていただきました。留学中もデビューしてからも大変なことはたくさんありましたが、がんばろうと思えたのは、僕たちにいろいろな経験をさせてくださった方々、家族や友人をはじめ応援して支えてくれる人たちにしっかり恩返しをしなければという責任感、それにメンバーの存在ですね。BBZの一員になってからは、一つの夢を7人全員で追いかけているというのがすごく大きい。やっぱり仲間がいるからこそ挫折したときにも乗り越えられると思います。

楽しむ気持ちを忘れないで。

奥田力也（おくだ・りきや）

小学2年生から大阪のEXPGというダンススクールに通い始め、キッズダンサーとしてステージに出させていただくことがあって、そんな経験からアーティストになりたい思いが強くなりました。オーディションに受かって、中学3年から3年半ニューヨークに留学させていただいたことが、世界で活躍したいという願いをさらに強固にしてくれました。留学を終えてBBZに入ったのですけど、自分の中ではここに来るまでの道のりは長かったです。うまくいかない時期もあって、それがあったからこそもっとがんばろうと思いましたし、ダンスやラップのスキルが伸びない時期があったとしても、将来のことを想像してモチベーションを常に上げながらやってきました。昔からそうですけど今も変わらずアーティスト活動はすごく楽しくて、辛いことはもちろんありますが、それ以上に楽しむ気持ちとあきらめない心を持ち続けたからこそ、今こうして活動させていただけるのかなと思っています。

RIKI 松井利樹

MIKU 深堀未来

ダンスから離れた半年がターニングポイント。本当の自分が現れた。

松井利樹（まつい・りき）

兄の影響で7歳のときに地元のダンススタジオに通い始め、アーティストになりたいと思ったのはそれから6年後。兄がバックダンサーをしている会場で初めてEXILEさんのステージを見て衝撃を受けてのことでした。学費免除の特待生になれたら入会していいと親に言われて、EXPGの特待生オーディションを受けて合格したのですが、2年目の終わりに一般生に落ちてしまい、学費のこともありましたがそれ以上に率直に悔しくて、小1から続けてきたダンスをまったくやらなくなったんです。学校が終わると友達と遊ぶ毎日になって半年くらい経つと、あれほど遊びたかったのに夢を追いかけていたときのほうが楽しかったと気づき、親にその気持ちを話したら学費を払ってあげるからもう一回通いなさいと言われて。1年後に特待生に戻り、その2年後にBBZに入るきっかけとなったオーディションを受け今に至ります。僕にとってダンスから離れた半年間はターニングポイントでした。半年遊んだら本当の自分が現れました。

MASA 砂田将宏

RICKY 奥田力也

地に足をつけながら、ずっと先にあるものを考えてみて。

砂田将宏（すなだ・まさひろ）

姉の影響で小学1年のときにダンスを始めました。サッカーも並行してやっていて最初はサッカー選手になりたかったんです。9歳ぐらいのときに初めてEXILEさんのツアーにキッズダンサーとして出させてもらったことが、こんなステージに立てるようになりたいという夢を持つきっかけになりました。そこからもうひたすらその夢を追いかけ続けてきた感じですね。学校の同級生たちに放課後に遊びに誘われても行けなかったりすると、ダンスをやってなかったらと思うこともありましたが、その当時から未来とか力也が近くにいてライバルみたいな関係性で、レベルの高い同世代の子が周りにいることで、自分も人一倍努力して負けないようにがんばらないと、彼らの存在が自分のモチベーションになっていた。そういう意味でもすごく環境に恵まれていました。遊びたい気持ちはあっても、負けないために必死に練習に励んでいた感じです。

PSYCHIC FEVER
from EXILE TRIBE

LDHが運営するダンススクール“EXPG STUDIO”の精鋭が全国から集まった７人組のグループ。日本はもちろん世界に通用するグローバルアーティストをめざし、“ビルボードチャートグローバル1位”の目標を実現するべく、挑戦を続けている。

PSYCH_OFFICIAL

選択に迷ったらどちらが親にとって幸せか考えるほうがいい。

―― 剣（つるぎ）

小さいころから空手をやっていて、嫌々だったのに体格に恵まれていたので、大会で1位をとるのが当たり前に。すると親は喜んでくれます。僕は親が喜ぶ顔が好きでした。でも成長して体が大きくなると、体格やセンスだけでは勝てなくなり、努力している人が強くなっていく。そのうちに実力に差がついて負けると親も嫌な顔に。小学6年のときに思いがつのって、反抗してやろうと、空手やめると言ったら親は「空手がなくなったら何ができるの？ サッカーも野球もできないし」と。「ダンスだったらできる。ダンスなら靴さえあればすぐに始められる」と僕は反論しました。経験はまったくなかったのに、根拠のない自信だけはありました。空手の「型」をやっていたので、ダンスは柔らかい型だと考えたんです。飲み込みはすごく早かったですよ。やるなら将来食っていけるくらいやれと、親がサーチしてくれたのがＥＸＰＧでした。夢があって未来があるスクールだと。そこから僕はPSHYCHIC FEVER（ＰＣＦ）のメンバーになりました。

僕は10年かかってＬＤＨに。あきらめないこと！

―― 中西椋雅（なかにし・りょうが）

何か習い事をと両親が考えてダンススタジオに連れていったとき、僕は４歳でした。母がやっていたバレエよりもヒップホップダンスがいいと言って習い始めたんです。後に大阪にＥＸＰＧというダンススクールができるというのを聞いて、昔からＥＸＩＬＥさんが好きな両親が行ってみようと。そこで初めてＥＸＩＬＥさんのライブを生で見て、ダンスって楽しい、あんな人たちになりたいと憧れて、ＬＤＨに入りたいと思ったのが９歳でした。僕がＰＣＦのメンバーになったのが20歳なので、10年以上かかってようやくです。ダンスをやめたいと思ったこともありますが、あきらめなくてよかった！ 両親にも強制されたことはなくて、だからこそ自分の中でしっかりゴールを決めたいと思って今に至ります。

REN 渡邉廉

RYOGA 中西椋雅

TSURUGI 剣

努力は人を裏切らない。努力するほどに自分の身になると思う。

——渡邉廉（わたなべ・れん）

あるオーディションをきっかけにLDHが運営するEXPGというダンススクールに入校して、中学3年生のときに初めてEXILEさんのツアーにサポートダンサーとして出させていただいたのですが、そこでメンバーがステージに上がったときのお客さんの歓声を聞いたときに、本当に鳥肌が立って、これがアーティストなんだと思った。それまではひたすらダンスのスキルを磨いてダンサーになりたかったのですけど、アーティストというのは人を感動させる力があるんだと知り、自分もそういう存在になりたいと思ったのがアーティストをめざすきっかけです。小さい頃は嫌々やっていたこともありましたが、やっていくにつれてダンスの楽しさに気づき、ライブの歓声を聞いたときに自分も感動を与える人間になりたい、もっとレベルアップしたいと本気になりました。

ルーツもこれまでの経験も自分のダンスに繋がっているという発見。

——JIMMY（ジミー）

僕は小学生のころ、友達がこっちに行ったらそっちに行きたくなるようなタイプで、部活も野球、サッカー、バスケ、そろばん教室。それから友達に誘われてダンス。ダンスは難しくて速攻やめようと思ったんです。みんなうまい子ばかりだったので悔しくて。でもなぜか唯一のめり込んで、友達がやめてもダンスは一人でもやりたかった。もっとうまくなりたくて。ダンスを始めてから、母が好きで見ていたEXILEさんのダンスがめちゃめちゃうまいと理解できるようになり、この人たちみたいになりたいと憧れるように。父が黒人でブラックミュージックや洋楽が身近な環境にあり、好きな音楽も少しずつ増えていきました。ルーツやバスケを含めて経験してきたことが、自分のダンスに繋がっていて、それをときほぐしていく作業がすごく楽しくなったんです。その中でラップという表現に出会いました。ひたすら研ぎ澄ましていったのがダンスとラップです。今もダンスを始めたばかりのころと同じくらい楽しいです。

KOKORO 小波津志（右端）

JIMMY ジミー

続ける力の大きさはすごいと改めて感じている。

——小波津志（こはつ・こころ）

テレビでマイケル・ジャクソンやEXILEさんを見て3歳から踊っていたそうです。ダンスをやりたいと言い出したのが幼稚園のときで、それから1年ほどは泣いてお願いするくらいだったとか。地元に一つだけあったダンススタジオに通わせてもらえることになりブレイクダンスからスタート。ダンスバトルやコンテストに出て、夢はダンスの先生でした。ところが小学校高学年のころ体格が大きくなってうまくブレイクができなくなり、勝てないことが多くなった。感覚だけで表現してきたので基礎的な努力の大切さをそこで知りました。

WEESA イーサ

RYUSIN 半田龍臣

1、2年ダンスをやらない時期があり、それが考える時間になって、音楽を聴くだけでのっちゃう自分がいる、そういう気づきもあって、もう一回やってみようかと気持ちが動いたときにオーディションの知らせをいただき、EXPGスタジオ沖縄に入ることに。家族とダンス仲間に支えられて再スタート。運がよかったです。ボーカルレッスンも受けて、練習を積み重ねて、今は当時考えてもいなかったボーカルをやらせていただいているので、人生何があるかわかりません。ずっとやってきてよかった。続ける力の大きさはすごいと改めて感じています。

4 見る人を笑顔にするアーティストになりたい。

―半田龍臣（はんだ・りゅうしん）

歳からダンスをやっていて、中学までダンス一本。元々は母に無理やり連れていかれたんですが、いろいろなダンススクールに通い、楽しさを知り、見た人を笑顔にするダンスって素晴らしい、仕事にしたいなと思っていました。中学3年でEXPGスタジオに入り、高校生のときに三代目 J Soul Brothersのツアーに帯同させていただいたのですが、そのライブを見に来た方々の顔見たときに、こんな顔で三代目さんのことを見るんだと衝撃を受けて。感極まって泣いている方もいたんです。初めて生でステージを見せていただいて、背中もすごく大きかったですし、見に来てくださる皆さんの顔が輝いていて、僕もいつかこんなふうにパフォーマンスで世界中の人を笑顔にするアーティストになるのが夢ですね。皆さんにアドバイスできるとすれば、あきらめないことです。

小 楽しみ方を見つけるといい。

―WEESA（イーサ）

さいころから音楽とアーティストが大好きで、アーティストをめざしていました。小学1年のときにマイケルジャクソンのパフォーマンスを見て、歌とダンスで気持ちを伝えるのはかっこいいと思い、そこからダンスと歌、それに絵も始めて、自分で作り出していく中で、LDHの昔の音楽などを聴いてアーティストに憧れを強くしました。さまざまなことを経て今やっとアーティストになれた感じがします。音楽をやっていくうえで大変だったのは僕にとっては変声期で、高い声が出なくなり思うように歌えなくて泣いてしまったことも。絵は今も描いていて、メンバーが担当している配信のロゴを作ったり、いろいろ使っていただいています。目標に近づくために、それほど好きではないことをすることもあるかもしれないけれど、それをどう楽しんでいくか、楽しみ方を見つけるといいですよ。

構成・レッスン写真／ムシカシントーン小河修子